

西晋一郎の道德教育思想

片岡 絵里子

はじめに

日本人の伝統的な教育思想を考えていくうえで、道德教育の問題は欠かすことができない問題である。私は戦前期に道德教育論および国民教育論を構築して教育界に大きな影響を及ぼした人物である西晋一郎(1873～1943)を取り上げ、彼の道德教育思想について考察していきたいと思う。

西晋一郎は1873年(明治6)に鳥取市で生まれ、幼少時から中・高等学校時代までに儒学の教養を身につけた。1896年(明治29)東京帝国大学文科大学哲学科に入学し、1899年(明治32)に同大学を卒業するとともに同大学院へ進学した。当時、日本は西洋文化受容の全盛期であり、学术界もその影響を受けて西洋思想の受容に躍りになっていた。西もまた大学・大学院時代には西洋哲学・西洋倫理学の研究をしていて、ライプニッツ、ロッチェについての論文を発表し、グリーン¹⁾の翻訳をこなし、プラトン、アウグスチヌス、ヘーゲル、シュライエルマッヘル、カントなどを通じ精読し、既に西は西洋倫理学の研究者として頭角を現してきていた。大学院に在学中の1902年(明治35)に山口高等学校時代の恩師であった北条時敬²⁾の求めにより、創設された広島高等師範学校の教授となり、倫理学を担当した。このことが西の研究の方向性に対して大きな転機となった。倫理学を講義しはじめた当初は、自分が学び研究してきた西洋哲学や西洋倫理学を教えていたけれども、後に教師となる学生・生徒らを教えることの使命を自覚するにつれて、また師であった北条が国民道德の講義をするようにと勧めたこともあって、ただ学問を追求するだけでなく、教育をするにあたり道德を基本にすべきだと考えるに至った。西洋の研究よりも日本の教育論・道德論について考えていくことの必要性を感じるようになったのである。その際に、東洋や日本の伝統的な倫理思想、特に儒教に関する研究を深め、日本の国情に合った実践的でわかりやすい教育論を打ち立てようとした。西は

置かれた状況の中で自然に道德教育や教育について考えていくようになったのである。1929年(昭和4)広島文理科大学教授になり、38年間在職し、広島高師・文理大の有名教授として日本の教育界に影響を及ぼした。1940年(昭和15)退官して名誉教授となり、1943年(昭和18)広島市で70歳の生涯を閉じた。

西が戦前期に教育界に大きな影響を及ぼしていたということは、西の思想が当時において広く共感され、また理解されていたことを物語る。しかしそれほどまでに影響を及ぼしていながら、戦後の今日ではあまり西の名前は知られていない。その理由は西の思想が国粹主義的な思想ととられ、現代の思潮とは乖離しているとされ、加えて西の業績が純然たる理論を構築する学問ではなく、当時の道德教育の実践に役立つ理論の構築と考えられたからであろう。

今、改めて西の思想を考察するという事は、当時の日本の教育界を支配した主要な教育思想を把握することにある。西が「国体」や「教育勅語」体制の歴史的背景の中で、かたや西洋思想を受容しつつも、時代の流れに沿うべく日本独自の思想の構築に努力した姿を見ることができると思う。従って本論文では、西の考えた日本の道德の本質や日本の道德教育思想、また国民教育論について考察していきたいと思う。

1. 国民道德論

(1) 日本道德の本質

I 道德の前提としての国家

西は道德を教育していくうえで、どのような内容の道德を教えるべきであると考えたのだろうか。前述したように西は西洋倫理学を学んだのであったが、西洋倫理学が一般普遍的倫理学ではなく、世界に通じる人類普遍的道德真理ではないことに気づいた。「法律の学、政治の学、国家の学の如きもさうであらうが、特に倫理の学は其国民と其の歴史とに根ざす所が深く単に抽象的一般的な倫理論ではない」³⁾。西洋には西洋諸国それぞれの国民と歴史に根ざす倫理学があるので

あり、日本には日本人と日本の歴史に根ざす日本倫理学がある。西は日本にとってはそれが日本人の道徳にあたる考えたのである。「道徳を論ずる学問を倫理学と称するなら、其国にあつては其国民の道徳の学がそのまま倫理学であつて、その外に別に一般の倫理学といふものはないのである」¹と云う。このように考えると日本において道徳を教育するということは、日本の道徳を教えるべきであるという考えに到達したのである。

西が構想した日本の道徳の根本には、「道徳は国の形態の精髓ともいふべく、人心の内外表裏に徹して最も統一的である意思の成形である」²というように「国」・「国家」という強い前提があつた。この「国家」意識は道徳だけではなく、道徳教育や教育についても貫かれている。西洋哲学・西洋倫理学を研究し、日本のそれと比較した結果、西が国家を強く意識し、道徳の基本を「国」・「国家」に置いた理由は奈辺にあるのか。

人間がどういう存在であるかと考えたときに、「人は国家の中に於てのみ其人間性を實にし得るもの、人間性は国民性を通じてのみ實にせられるものである」³と述べるように、西は人間は国家に属する存在であるという考えを基にしていた。国家に属する人間と道徳の関係を考えたとき、次のように明確に述べている。

「道徳は国家と終始するが常で、道徳を欠ける国家の立つわけがなく、国家亡びてはやがて人も亡びるは、人間とは道徳的生存に外ならぬからである。其の道徳は其所の習俗に由来し、種族民族の性情、国土の形成、立国の事情等に本づき、歴史的に成れるので、国家と歴史と人間とは一実であり、人間とは歴史的生存に外ならぬ。人間は自国の歴史の中に終始するから、容易に他国の道徳風習が知れない」⁴。

国家の形成においては、民族があり、そこに文化が生まれ、歴史があり、その国の精神が起ってくる。民族については、「すべての道徳は皆民族的のものであることは言語文学芸術乃至百般の文物制度がさうである如くである。道徳は本と其民族の生活習慣の形で行はれて社会的生活の統制たるものであるから、其国其国の流儀があり、其国の歴史と共に成形せられ発達し来るのである」⁵と述べる。道徳は民族の生活習慣の中から社会的統制のために生じ、行はれてきて、やがて民族が国を形成し、文化が生まれ、歴史が積み重なり、精神性を帯びてくる。人間はただ単に存在しているのではなく、歴史的な積み重ねの上に生きているの

だと西は考えた。その歴史は自然の枠組みで起こった民族の、そして国のなかで積み重なってきたものである。だから西は人間は国家の中にのみ存在すると考えた。この考えは日本だけではなく、世界の他の国においても通じることであるというのが西の主張となる。

II 忠孝という思想

西は国家を考え、日本の民族・歴史・文化を考えたとき、日本人に適した、日本人が本来持っている道徳があると考えた。それは、西洋の倫理学が日本に入ってくる以前の江戸時代までに盛んだった東洋思想であり、かつ日本思想でもある儒教の中にあると考えた。おそらくこれは西が西洋の学問を勉強する以前に、儒学を学んでいたことが影響していたと思われる。儒教に基づいて道徳を考えた場合、「忠孝」、特に江戸時代の儒学者である中江藤樹の「孝」という概念に西は影響を受け、その概念が重要となった。

この「忠孝」という考え方は西の道徳思想の根本にあり、彼の道徳観を表していて、道徳教育と教育論にこの考え方が貫かれている。「我国において忠孝が道徳の根本であり、道徳そのものである」⁷と、日本の道徳は「忠孝」が根本であり、道徳そのものであるとはっきり述べている。そして「忠孝は国民道徳の徳目の徳の一でもあるし、また国民道徳そのものである」⁸と、「忠孝」が日本の国民の道徳であるとも述べている。これらの語録からわかるように、西は「忠孝」が日本の道徳であり、日本人の道徳であると考えたのだった。

ではなぜ「忠孝」が日本の道徳であると見なしたのか、そして「忠孝」とは何であると考えたのかを探ってみたいと思う。西は道徳を教えるにあたり、人々が社会で生活していく中で、どんな人にもわかりやすく実践しやすい道徳を考えた。それは日本の歴史と文化に基づき儒学から学んだ道徳であつて、抽象的な道徳ではなかった。「最も深広なるものは最も現実的のものであると思はれる。先づ我が足許から出発せねば真実の問題は起こらぬ」⁹と云うように、現実即して道徳を考えることが一番大切であると考えた。そして具体的には「我が民族の将来と国家の前途を思ふは人間の最も真剣なる感情であり、君国に忠、親に孝なるは最も現実的なる道徳であつて、此の中にこそ最も深厚広大なる群生の慈愛も宇宙的理法も抽象的にでは無く具現的に即ち真に生きてをるわけである」¹⁰と、「忠孝」という概念のなかに「君に忠」、「親に孝」という対象のはっきりした道徳の中身が明らかになってき

た。「我国の教は普遍の理の上に立たず、又普遍の理を象どれる対象上帝とか神とかに依拠せず、直ちに現前の君に忠、現在の親に孝といふ具象的事実の上に立つてをり、而して此具象的事実の中に夫の普遍の理は自から活発に流行してをる」¹¹⁾と言うのである。対象を天や神などといったような目に見えないものではなく、君や親という身近な存在に置きかえることによって、現実的で実践的な道德となると考えたのだろう。

西の「忠孝」論をさらに分解すると、「忠」より「孝」が基本となっていることがわかる。まず、「親に孝」とは、人間が生まれて最初に親密に接する父母に對することである。この親子関係において「孝」は養われる。子が親を尊敬し、敬愛して、親に純粹に順ずることが「孝」である。この「孝」を養うことによって、「家にあつて其の父母に順なるものは学校に出て其の教師に順であり、やがて国に於て其の君に順である」¹²⁾と言う。

「君に忠」ということも、結局は「孝」からきている。「国そのものこそ真実の家であつて、家々は国家を模範として其の形を成すものである」¹³⁾。国というものがまた家であるから、国においては親を尊敬するように、君を敬うことが「孝」であり、「臣民は君に對して子の親に於ける如く愛敬尊信を以てするは、孝以て君に移して忠となる所以とする」¹⁴⁾と言うように、君に對しての「孝」が「忠」となるわけである。「忠も畢竟孝である。忠孝一致は現実から見れば理念であるが、此理念が直ちに現実である所があるかなきは哲学の問題ではなく歴史が告げる所であつて、我が国の歴史が即ちこれを示すのである」¹⁵⁾。「忠」＝「孝」であることは日本の歴史から出するものであつて、「忠孝」という概念もつまりは「孝」を基本としていることがわかる。

「孝」と「忠」とを関連づける中に愛、信、敬、知といった人間の道德律も含み込まれる。西によれば、親の子に對する「慈愛は信を生み、信は法則と真理の尊敬を生み、後者が真知を発する。故に愛と知とは循環する。故に敬の至りは愛とも言はれ、又逆に愛は知を生むとも言はれる。故に敬には愛が常に籠るから敬愛でもある。これ道德の二大方面たる慈愛と知慧、仁と義、人道と正義の出づる所である。我邦に於ては忠孝これである」¹⁶⁾と言うのである。

日本において「忠孝」が道德となったのは、まず歴史的、文化的なことを考えれば、儒学の影響もあり、日本人に根付いていた感覚であり、わかりやすいものであったからであろう。

2. 道德教育論

(1) 家庭における道德教育

I 忠孝を養う親子の関係性

道德を教育するということは、西においては日本の道德である「忠孝」を教えることで、特にこの「忠孝」が養われるのは親子関係であると考え、西は親が子に對して行う道德の教育を重要視した。それは「忠孝」の基本部分である「孝」のその原点である「親に孝」を尽くすことが、「忠孝」の基盤であり、根本だからである。この親子関係が道德である忠孝の起こる出発点であり、始まりになると考えた。よって家庭での道德教育の基本となる関係性に注目したい。

道德である「孝」が起こるには、「道德は人生に於て実に兒子の其父母に對する信頼に始まるのである」¹⁷⁾として、子どもが親を信頼すること、信じることから「孝」は生じると考えた。「此信ずる心は人間に何時何時に起るかといふに親子の間に於て起るのである」¹⁸⁾と、人間が「孝」を生じる根本的な関係に親子の信頼関係を持ち出した。

親が愛情を持ち一生懸命になって子を育てること、その親の親心ともいえる慈愛が子どもにとって親に對する信頼生むのである。「父母の慈愛は兒子の信頼を招く」¹⁹⁾のである。さらに「信頼の心を分解すると敬愛の心である。其信頼する人をば敬ひ且つ愛する。信は尊信であり、頼は懐づき依る気味がある。これを敬ひ且つ親愛するから、これに萬づうち委かせる、其の我に對する言動は皆悉く我によかれとの心からであると領承してをる。若しそれが認識判断に照らしてさうと知るのであれば敬愛からではない。しかし尊信とか敬愛とか親愛とかいふことなくして單に智的判断によつてのみ事に処し人に接するといふ人生は利害得失のみによつて動く殺風景のものである」²⁰⁾と言う。親の慈愛によって、信じる心が起こり、それが信頼であり尊信であり、さらに敬愛する心が育つと言うのである。信頼するからこそ、敬い愛することができる。だから敬愛している親に従うことができるというわけである。

西の説く忠孝論は、人間の真理と結びつけられる。親の「慈愛は信を生み、信は法則と真理の尊敬を生み、後者が真知を発する。故に愛と知とは循環する。故に敬の至りは愛とも言はれ、又逆に愛は知を生むとも言はれる。故に敬には愛が常に籠るから敬愛でもある。これ道德の二大方面たる慈愛と知慧、仁と義、人

道と正義の出づる所である。我邦に於ては忠孝これである²¹と言うのである。「忠孝の由つて起る所は本能ではなく、尊信、信頼、敬愛、慈愛である²²」というのが西の言わんとするところであって、これらはまさしく親子関係から起こるものである。そこに教育の関係性が生じるのである。

II 教えと学びの生まれる関係

西にとって道德教育をするということは「道德の教育が所謂教である²³」という前提がある。「教とは勿論吾等の率由すべき道のことで、道德に外ならぬ²⁴」というように、「道德」すなわちは「忠孝」を「教え」とする考え方である。西にとってはこの「教え」が「忠孝」の根本である「孝」を起こさせるということになる。「忠孝」が「教え」となって「孝」が起こるにも、親子関係から生まれる信頼と敬愛が基盤となる。

子は親を信じ、信頼するからこそ親の「教え」を受けとめ、信じることができる。「信頼する故に其の教へを遵奉する²⁵」のである。つまり親は子に信頼されてこそ「忠孝」を「教え」として教えることができるのである。子は信頼できなければ親に従えず、親の教えを素直に受けとめることはできない。「信即ち信頼に背くから人と物とに安んずることが出ず、或は怒り或は恐れ或は逆らひ所謂子供の我侭が出て来る。かゝる我侭は無邪気に似て実は純真に遠ざかる所がある。こゝが順路を履み誤る一步であるから、これを單に子供の無邪気に過ぎぬと看過せずして、教へなければならぬ。而して其の教の由て生ずる所が孝である²⁶」として「教え」を正当化する。

西にとっては、「忠孝」を「教え」として訓育することが道德教育なのであった。「教とは人間をただ有用の道具として養成するにあらずして、人間を目的自身として自全なる人間性として育て上げるにあるとせば、教の由て生ずる所はただ敬愛尊信の心あるのみであり、後者は父母の全愛によつて始て児童の中に喚起せられる²⁷」がゆえに、親子における信頼と敬愛の関係ができて、それが基盤となることによって、教えることと学ぶことの基本的な関係ができるのである。

信じることは学ぶことにもつながってくる。信じることができなければ、学ぶ側にしてもその学ぶ内容を信じることができない。「吾々にあつてはすべて信受することを学ぶことの根本とする、即ち父母、教師を尊信する所から其の示教に順であることをいふので、それが心身発達の出発点である²⁸」と言う。西は尊信

に値する「教え」があるからこそ真の「学び」があるのだと考えた。教え抜きの学びは成り立たないことになる。その意味でも親子関係は教えと学びという、教育上最も基本的な教育関係の原点となるのである。

(2) 学校における道德教育

I 修身教育という教科の意義

家庭における道德教育は「忠孝」を教えて養う教育であると考えた西は、学校でもそれは同様であると考えた。家庭においても学校においても「忠孝」を養うことを基礎において教育を行うべきで、道德教育をすることなしに知識技術のみを授けることは教育といえなかった。道德教育である「忠孝」を「教え」として学校でも教えることには次のような考えがあった。そこには学校で何を教えるべきであるかという基本的問題を提起している。

「飽食暖衣逸居して教無ければ禽獸に近しとあるは少し極端な言方ではあるが、たゞ衣食住に事欠かぬといふだけでは吾々は満足が出来ないし、又道德が立たねば衣食住のみを事として生存競争が起るから、皆のものが衣食住を満足せしめることも出来ぬ。教育の内容がたゞ衣食住を成るべく豊かにするための知識技術を受けるのみであれば教とは謂われぬであらう。然るに人に自然に衣食住の必要と欲とがあり、同時に人に自然に知識欲や模倣性や模倣能力があるからそれを種として知識技術を受けることが出来、又人は他よりも勝れたい欲があり、立身出世を望むから、それが刺激となつて自から進んで知識技術の教育を受けようとする。然るに教育がこれだけであると畢竟生存競争の武器を授ける設備たるに過ぎない。同時に道德の教育がなければ却て世上は不安となるを免れぬ²⁹」。

人間が本能や欲望だけで生きるとすれば、そのように生きる動物と同じようなものとなる。本能や欲望も生きていくには必要だが、道德がなければ生きていくために生存競争が起きる。人間がお互いに社会の中で生きていくには道德が必要であり、人間として必然なのである。だから学校においてもまず人格養成として「忠孝」を養うことが第一となる。

「学校教育に於ける人格修養は忠孝の心を似て家國に役に立つことをする人の養成に外ならぬといふことに異存がない以上、忠孝の心を似て英語を習ひ、数学を修め、その外すべての教科を学ぶべきであることに何の疑もない³⁰」のであって、学校においても「忠孝」

を養うことが教育上の一番の本となっており、学校も教育全般が道德教育でなければならなかった。道德教育という「忠孝」を養うための科目があるわけではないのである。「道德といふ特別の生活内容がない以上道德教育を特種教育と考へることは出来ぬのである。道德とは一切生活内容の統一のことであるから道德教育とは一切諸智能の教育を貫通する教育的態度に外ならぬ」³¹⁾とも言う。人間の生活において道德を伴う生活が「生活」であるので、道德教育も教育の基礎でありながら教育そのものとなっているのである。

だから学校での道德教育というのは、家庭での生活と同じように学校での生活全般にわたって行われなければならないのである。「倫理的訓練とは学校における一々の課程を忠孝を行ふための道具と心得て修業せしめることに外ならぬ」³²⁾のである。道德教育が学校生活や授業で絶えず行われるべきであるということは、「忠孝」を養うための科目が特別にあるわけではないのという考え方なのである。学校では「忠孝」の心を持つことによって、すべての教科を学ぶことの意義がでてくる。

しかし、それは当時において日本の学校教育の筆頭科目とされた「修身」科そのものを否定するものではなかった。彼によれば、「修身教育といふ特別の科目は設けてあるがそれはすべての教科を教育的に有意義ならしめるための設置に外ならぬ」³³⁾のである。「修身科は自余一切教科の真意義、真目的を統一して示す役目を有つまでである。全教科の勉強が忠孝の練習であり生徒としての忠孝実行である」³⁴⁾からである。「修身教育」もしくは「修身科」という科目の位置づけは数学や英語などという科目と並列してそのうちのひとつとしてあるのではなく、すべての教科を統一し、教育の意義や目的を示す働きを持つものとしている。

学校においても家庭の延長線上として「忠孝」を養うことが道德教育であり、教えの基盤であった。学校教育全般において「忠孝」を養うことには、教育の意義や目的を明確にするうえで重要であり、諸教科を統一し指導する役割を担うものとして「修身」という教科の意義が認められることになる。

II 徳育と智育と体育の関係

西は学校教育における教育を徳育・知育・体育という三分野に分ける見方も、道德教育である徳育が教育の基礎となるのであり、教育を別々に分化し過ぎると道德教育は道德教育としての意義を得ないと考えた。「三者は対等的な関係にあるのではなく、従属的關係

にある、即ち徳が主人であつて智識技能と強健なる身体とは従であるから、徳育が教育の首座を占めて智育・体育は従属的地位にあるのである。強い身体と勝れた智識技能とは之を不正な目的に用ゐるとき大なる不正を為して、其害悪は智能身体の薄弱なるものの比ではない。して見れば徳育を怠つては智育・体育は其意義を失う理である」³⁵⁾と言う。教育を徳育・智育・体育と分けて考えるのではなく、教育全般に徳育があるからこそ智育と体育をすることの意義がでてくる。つまりは徳育を教育の底辺に据えるべきであった。徳育を別個の教育と見なせば、道德教育そのものの意義が失われてしまうのである。

道德教育という特別な教育があるわけではなく、智育である「知識技芸の習得」と体育である「身体の鍛錬」は徳育である「忠孝を養うという精神的修練」を内に含めて行われなければならない。学校教育というのは、「知識技芸の習得」と「身体の鍛錬」という具体的で現実的な知育と体育を行うことで、それに即して道德教育を行わなければ、「忠孝」を教えて養うことはできない。よって徳育は教育全般にわたり、教育そのものであることを理解することが、学校においての道德教育を考えるうえで必要であり、道德教育の位置づけと意義を明らかにすることになると考えたのである。

「道德教育即教育」という考え方は以上述べてきたことの中に表れている。こう考えれば、「徳育即教育」であり、「忠孝を教え養うことが教育」であるということになる。西の道德教育に対する考えは、家庭においても学校においても「忠孝」を教え養うことが教育の始まりであり、教育の基礎であり、教育そのものである。

3. 国民教育論

(1) 国民教育確立の課題

I 日本人の国民性と教育の課題

西の道德教育が教育そのものであるとする考えが、彼の道德教育論の考察によって明瞭になった。では西は日本人を教育することについて、どういう教育を目指していたのだろうか。そしてそのためには、どうすべきであると考えたのかを明らかにしたいと思う。

西によれば、日本人を教育するということは、日本という国を基にして日本人のための教育をするということ、つまりは国民教育をするということであった。これは国家を前提として考えた道德観と同じ考え方が

らきている。「人は国家の中に於てのみ其人間性を実にし得るもの、人間性は国民性を通じてのみ実にせられるものである」¹⁶と、人間は国家に帰属している存在と考えたがゆえに、日本では日本の教育をすることが当然なのであった。国民教育に対して西は次のように要求する。

「国民の教育は国の本に常に反省すべく、国の自己即ち国の歴史である。歴史は過ぎ去つて今は無い所の昔の事ではなく、今昔を通じて、時勢の変に応じつゝ、能く自己たる所を常に現実にするものであつて、かゝるものは只形態ではなく、形態を造る精神である。人間に於ては歴史と自己とは同じである」¹⁷。

「精神が生活の精髓であるとは精神に於て独特性が直接態に居るからである。精神の相続が生存の核心である。故に一切教育の眼目は歴史文化の相続にある。換言すれば国民的精神の相続が一切教育の終局目的であつて、是によつて普遍的人間性の実現せられると思惟せられる。故に国民教育の外に人間としての教育ありとは思はれぬ」¹⁸。

教育を考えるうえでも、国と歴史と文化という概念が重要になってくる。道徳が国の歴史や文化の積み重ねで生まれ、国それぞれに存在するのだから、道徳教育も国それぞれに存在する。その道徳教育は教育全般にわたらねばならず、教育そのものであるから、教育もその国の教育が必要となるのである。それが国民教育と呼ぶものとなるのである。これは国家を前提として考えた道徳観と同じ考え方である。その国にはその国の歴史と文化があるから、その国にはその国の道徳があり、教育があるということである。

「人としての教育といふ論があるなれど、一般的文化のない以上人を教育するものは国々の文化の外は無いから、国民教育の外に人間の教育といふものはない、人間としての教育といふのも国民教育の裡に自らあるのでなければならぬ」¹⁹と言う。道徳を考えたときと同様に、世界一般の歴史と文化はないのだから、どの国においてもその国の教育があるのが当然であり、それぞれの国の教育に特色がある。人間を教育するということは、人が国に帰属しているので、その国の人間に対する教育、すなわち国民教育があるべきなのである。「吾々は米で養はれ西洋人はパンで養はれる如くに、吾々は吾邦の歴史によりて教育せられ英国人は英国の文物によつて教育せられるので、其所に人間教育とは国民教育のことであるといふ意味を見るのである」²⁰とも言う。すなわち教育そのものが国民教

育となるのである。

また当時、教育がどの国でも旺盛となり、日本でも学校教育などの教育に力を入れていった。西も教育者となり、しかも将来教育者となる若者の教育を担当することによって、教育についての考究を深めた。西が教育について考究を進めたのは、良き教育を目指していたからであつたが、そこには教育の目的が世間において何であるのかが不明確であり、また教育が熱心になるあまりに教育の本当の目的が失われて、教育の意義が失われることの危機を憂慮したからでもあると思われる。教育の本当の目的が見失われると、教育は教育とならないと考えた。西は教育の目的が知育することに傾き、道徳教育を伴わない教育をしている事実を指摘したのであつた。教育が時代や社会の要請によって富国となるための知育に傾斜し、教育方法や教育環境にもその影響が表れてきて、道徳教育を伴わない教育をしている現状にあつた。西はそのことを批判して、教育の意義が失われると、例えば人間が飲食をするのと同じような欲望や自分の利益を求める功利に陥ってしまうと考えたのである。西は日本の教育のこの現状からさらに道徳教育の重要性を認識したと思われる。

お わ り に

西晋一郎の道徳教育思想は、儒教からでてきた「忠孝」、特に「孝」を基に発展してきた。「孝」を道徳とすることにより、家庭においては親子の関係性のなかで、学校においては学校生活と授業のなかで、「孝」を養うことが道徳教育であり、教育の始まりであつて、それが教育の基礎であり、教育そのものであるというのが西の考えだったのである。これが「道徳教育即教育」という考え方なのであつた。

西がこのような考えるに至ったのには、幼少時から中・高等学校までの儒学の勉強が強く影響していることもあるし、また彼の思想には戦前期日本の時代の流れが色濃く、かつ敏感に投影されていると考える。

西の思想の形成と展開には、伝統的な教育思想が西洋思想を受け入れつつも確立しようとしていた一つの過程を見ることができ、時代的影響下の日本人の伝統的な教育思想の変遷をうかがわせる。西自身も教育のことについて「教育について考ふるに、教育は次の時代を造るべきものであるが、又実に其時代相の反映を免れないが常である」²¹と言うように、自らの思想もまた時代の影響を受けざるをえなかったことを認めて

いる。西の思想は戦前期の思想界の動向を象徴していると思う。西欧の新知识を装備した多くの著名人が、日本精神に傾倒し、結果的には軍国主義を容認・支持していく思想の軌跡の典型例を西にも認めることができる。

時代が変われば西の教育論はその役目を終えたかといえ、そうである部分とまだ参考にすべき部分とがあると思う。西は明治から昭和戦前期まで「忠孝」という思想を基盤として、人々にわかりやすく実践しやすい教育論を打ち立てようと懸命に取り組んできた。彼の著作物数の多さから、教育に対する熱意が感じられる。特に教育において道德教育の問題を重要視し、その実践的な教育を目指し、忠孝の思想を実践に移すために、抽象的な天や神を対象とするのではなく、「君に忠」「親に孝」という対象の明確な道德を考えた。それは時代的な制約のなかで生まれてきた思想であり、現代社会に適応しない思想であるが、彼が人生の大半をかけて教育について考究したことの中には、教育に対する普遍的な問題が提示されている。古代ギリシャにおいて、ソクラテスとプラトンの対話の中で、「徳は教え得るか」を問題にしたように、道德教育は人間教育にとって永遠の課題である。その方向・方法はともあれ、西はこの問題に真正面から取り組んだ。戦後の日本の教育では積極的な取り組みがなされていない課題である。

西の問いかけは、教育の本当の目的とは何なのか、教育の意義とは何であろうか、ということであった。そのことは西が教育について考えるにあたり、最初に直面した課題であった。彼は戦前期の時代思潮のなかで教育の根底には、「忠孝」の道德教育が必要であると考えた。現代において時代的背景、時代的環境が違って、西のその考え方は現代にも通じるものがある。もちろん「忠孝」を養うことが、グローバル時代の現代に通じるのではない。しかし人間は自分の自我や欲望で生きている動物とは違い、人と人とのなかで、社会の相互関係のなかで生きている。お互いに生きていくためには、道德が必要であり、そのための教育つまりは道德教育が必要なのである。これが道德教育をすることの根本的意義であり、世界にも通じることである。そしてその根本を基礎にして、世界の国々の独自の文化の中で発展してきた道德教育思想があるのである。現代の国際化のなかでは、私たちはお互いに環境・民族・文化の違いを認識したうえで、つまり多文化の共生の中で、改めて道德教育を考える必要がある。

私は西の思想を批判的・否定的に見るのではなく、その時代性・歴史性を考慮して、日本の伝統的な教育思想の一つの流れとして理解する必要があると思う。そこから現代の教育と照らし合わせて、欠けている部分やこれからさらに考え直す部分を得るヒントが、西の道德教育論に求められるのではないかと思うのである。

西の思想と戦後の教育思想とを比較すれば、その違いは明らかに表れているし、西の思想を旧思想として断罪することは容易である。しかし、改めて歴史的視座から日本の教育思想を学ぶとき、その中には現代に活かしていかなければならない多くのことを発見するのである。

注

- 1) 西晋一郎『国民道德講話』藤井書店、1932年、5頁。
- 2) 同上、2頁。
- 3) 西晋一郎『天の道人の道』目黒書店、1937年、219頁。
- 4) 西晋一郎『教に由つて生ずる所』目黒書店、1930年、1頁。
- 5) 西晋一郎『人間即家国の説』明世堂書店、1944年、131頁。
- 6) 前掲『国民道德講話』、3～4頁。
- 7) 前掲『教の由つて生ずる所』、141頁。
- 8) 同上、67頁。
- 9) 前掲『天の道人の道』、17頁。
- 10) 同上、18頁。
- 11) 前掲『人間即家国の説』、37頁。
- 12) 前掲『天の道人の道』、33頁。
- 13) 同上、116頁。
- 14) 同上、113頁。
- 15) 西晋一郎『忠孝論』岩波書店、1931年、46頁。
- 16) 西晋一郎『国家・教学・教育』目黒書店、1939年、19頁。
- 17) 前掲『国家・教学・教育』、16頁。
- 18) 同上、7頁。
- 19) 前掲『天の道人の道』、32頁。
- 20) 前掲『国家・教学・教育』、12頁。
- 21) 同上、19頁。
- 22) 同上、38頁。
- 23) 同上、4頁。
- 24) 同上、3頁。
- 25) 前掲『天の道人の道』、32頁。
- 26) 前掲『教の由つて生ずる所』、8頁。
- 27) 同上、13頁。
- 28) 前掲『天の道人の道』、31頁。
- 29) 前掲『国家・教学・教育』、3～4頁。
- 30) 前掲『教の由つて生ずる所』、148頁。
- 31) 前掲『教育と道德』、80頁。
- 32) 前掲『教の由つて生ずる所』、91頁。

- 33) 前掲『教育と道德』, 81～82 頁。
- 34) 前掲『教の由つて生ずる所』, 152 頁。
- 35) 前掲『国家・教学・教育』, 46 頁。
- 36) 前掲『教に由つて生ずる所』, 1 頁。
- 37) 前掲『天の道人の道』, 52 頁。
- 38) 前掲『教育と道德』, 30～31 頁。
- 39) 同上, 179 頁。
- 40) 同上, 171 頁。
- 41) 前掲『教の由つて生ずる所』, 124 頁。